

牛群検定
40年誌

牛群検定

40年誌

乳用牛のベストパフォーマンス
実現のために

乳用牛群検定全国協議会

乳用牛群検定全国協議会

目 次

ご挨拶	牛群検定40年誌発刊にあたって	乳用牛群検定全国協議会会長	鎌田 壽彦
祝 辞	我が国酪農の生産基盤の強化に向けた乳用牛群検定事業 活用されてこそその牛群検定	農林水産省生産局畜産部畜産振興課長 一般社団法人 家畜改良事業団理事長	藁田 純 信国 卓史

第1章 乳用牛ベストパフォーマンス実現のための取り組み

1 牛群検定の活用

今こそ、牛群検定の役割が重要！

北海道酪農検定検査協会専務理事 熊野 康隆…… 9

2 農家指導

・十勝酪農の発展過程を振り返る

(北海道) 十勝農業協同組合連合会 西部 潤 氏…… 12

・大山乳業農業協同組合の取り組み

(鳥取県) 大山乳業農業協同組合 今吉 正登 氏…… 15

・飯塚支所管内における繁殖台帳システムの活用事例

(福岡県) ふくおか県酪農業協同組合 大神 與市 氏…… 17

3 ベストパフォーマンス実現事例

(1) 北海道事例

・みんなが幸せになる酪農経営を！

(北海道) 有限会社友夢牧場 湯浅 恵次 氏…… 20

・ロボット搾乳、家族一丸となつての挑戦

(北海道) 株式会社ベイリッチランドファーム 浦 薫 氏…… 23

(2) 東日本事例

・将来性のある牧場を目指して

(栃木県) 高瀬 賢治 氏…… 28

・酪農人生に夢あり

(長野県) 前田 勉 氏…… 31

(3) 西日本事例

・すべての出逢いに感謝！！

(岡山県) 亀山 昭博 氏…… 35

・無理をしない 無駄をしない 牛も人も健康に！！ (徳島県) 高瀬 敏 氏…… 38

第2章 乳用牛ベストパフォーマンス実現のための最新知見

1 乳用牛のベストパフォーマンス ベストパフォーマンス実現会議座長

畜産・飼料調査所 御影庵主宰 阿部 亮 氏…… 43

2 繁殖成績向上のための飼養管理

国立大学法人帯広畜産大学教授 木田 克弥 氏…… 49

3	ベストパフォーマンスを発揮するための暑熱対策	国立大学法人京都大学教授	久米 新一 氏	57
4	経営改善のための効果的な乳用牛のパフォーマンス向上とは	酪農学園大学獣医学群教授	中田 健 氏	64
5	酪農現場における飼養管理指導のポイント	公益社団法人北海道酪農検定検査協会参与	田中 義春 氏	69
6	検定農家をいかに増やして、普及を行ってきたか	大山乳業農業協同組合課長	今吉 正登 氏	76

第3章 乳用牛群検定の40年の歩み

1	乳用牛群検定の40年の歩み	一般社団法人 家畜改良事業団専務理事	守部 公博	83
2	40年抄録	乳用牛群検定全国協議会	事務局	
(1)	車の両輪である牛群検定と後代検定			86
(2)	「個」から「群」の時代へ			90
(3)	牛群検定データを活用するために			94
(4)	牛群検定の簡易化の歩み			100
(5)	新しい牛群検定			104
(6)	新たなステップへ			108
3	乳用牛ベストパフォーマンス実現セミナー			
(1)	乳用牛ベストパフォーマンス実現セミナーの開催			113
4	付 録			
(1)	牛群検定の40年			122
(2)	牛群検定帳票見本			130
(3)	検定関連器材等			141
(4)	牛群検定関連規程等			145
(5)	乳用牛群検定全国協議会			155
(6)	各都道府県における牛群検定の普及			170
(7)	牛群検定関係年表			182
(8)	乳用牛群検定全国協議会会員名簿			186

編集後記

広告協力 (一社)家畜改良事業団 (株)デーリイ・ジャパン社 (一社)全国酪農協会
 (株)IDEC サージミヤワキ(株) オリオン(株) (株)コーンズ・エージー
 デラバル(株) フジタ製薬(株) (株)コムテック 富士平工業(株)
 全国農業協同組合連合会 全国酪農業協同組合連合会
 森永酪農販売(株) 雪印種苗(株)

ご挨拶



牛群検定40年誌発刊にあたって

乳用牛群検定全国協議会 会長

鎌田 壽彦

牛群検定は昭和50年2月に運用が開始され、平成27年に40年の節目を迎えました。ご案内のとおり牛群検定は、わが国酪農の生産現場を飼養管理、繁殖管理、衛生管理、遺伝的改良の面から支え、この40年の間に305日検定乳量は検定発足当時の5,826kgから平成27年には9,450kgへと、実に3,624kgもの向上をみております。これは、40年間の牛群検定実施農家個々における遺伝的改良の取り組みとデータに基づく酪農経営の成果であることは言うまでもないことです。また、見方を変えれば、雨の日も風の日も立会業務を担っていただいた検定員の方々や農家指導に奮闘された牛群検定関係機関の方々など、多数の関係者のお取り組みに支えられた成果でもあります。

このあたりの牛群検定開始草創期あるいはその後の変遷については、「牛群検定30年誌」に詳しく紹介されていますので、詳細はそちらに譲ることといたしまして、この10年においても牛群検定を取り巻く環境は大きく変化しました。

その最たるものが資源頭数の急速な減少と生乳生産量の減退で、平成27年の数字を10年前と比較しますと、経産牛が18万7千頭減の87万頭、生乳生産量が88万7千トン減の740万7千トンとなっております。

平成18年あたりから顕在化してきた飼料価格の高騰とその後の高止まりの中で、後継者難や経営不振の農家の離農が進んだことによるもので、そこには平成10年代半ばから散見され始めた個体乳量の伸び悩みや最近の初妊牛価格の高騰など、酪農にとってまさに生命線ともいえる後継牛生産に大きな課題を抱えていることを教えるものともなりました。

また、牛群検定にとっては、長年にわたり事業を支えてきた国庫補助の終了という大きな出来事があり、これに伴い全国協議会自体も牛群検定のなかでの位置づけに大きな変化が生じたところです。

すなわち、乳用牛群検定普及定着化事業の名のもと、国の補助事業として検定の実務を担ってきた都道府県事業が平成17年度の交付金化を経て、平成18年度には税源移譲により完全に都道府県に移管されたことは記憶に新しいところです。そして、検定成績の全国集計等の業務についても平成22年度をもって国の助成が終了し、平成23年度からは従来の都道府県事業ともども、それまでの国の補助事業上の約束事に代わる全国統一のルールのもとでの歩みを求められるところとなります。

具体的には、乳量計の定期検査や検定関連機器の国内認定などを担ってきた全国協議会に、全国の牛群検定を統一的に実施するためのアンブレラ組織としての位置づけがなされ、牛群検

定はこれまでと同様の方法・内容で検定を継続実施することが可能となります。

このような内的・外的環境の大きな変化の中にあって、牛群検定の普及率は平成25年に頭数比で60%を、平成26年には戸数比で50%を超えるところとなります。そして、直近の平成27年度では戸数比で51.2%、頭数比で61.4%となっていますが、最近の動きの中で気がかりなのは、それまで僅かずつでも増加していた検定頭数がこの10年、漸減傾向にあるということです。

これは都府県を中心とした飼養頭数の急速な減少の影響であることに疑いの余地はありません。ここにあたり、わが国酪農をリードしてきたのは牛群検定農家であり、出荷乳量と収益性の確保に欠かせない個体乳量の向上、飼育する乳牛の長命で健康的な飼養管理、質と量の両面を意識した後継牛の的確な生産といった課題の解決には、牛群検定の持てる機能を存分に発揮させる以外、方法がないことを再確認する必要があると思います。

平成26年に国の主導により始まった乳用牛のベストパフォーマンス実現の取り組みは、まさにこのような視点に立ったもので、全国協議会としても当該取り組みと連携し、牛群検定開始40年という節目の年に乳用牛ベストパフォーマンス実現セミナーを開催するなど、さまざまな機会を利用して取り組みの周知徹底を図ってまいりました。そして、その流れの中で本記念誌もセミナーでご講演いただいた方々に多数ご執筆いただき、30年誌の続編として編さんしたところです。

申すまでもなく、牛群検定40年の営みと成果は一朝一夕になったものではなく、一日一日の積み重ねの上に築かれてきました。40年前に全国88検定組合、5,700戸、80,000頭でスタートした牛群検定は現在、240組合、8,353戸、535,000頭で実施されています。世界各国がそうであるように、わが国でも今後、データに基づく酪農経営という考え方がさらに重視され、一般化するであろうことは想像に難くありません。

そして、その流れの中で牛群検定にはさらなる普及拡大と併せて、Web化等を通じた情報の質的拡充が求められるのは自明の理でありましょう。今後とも先を見据えた対応は怠りなく進めなければなりません。一方ではいかに時代が進み技術が進歩しても、検定の原点が記録の正確な収集にあることには何らの変わりもございません。

関係各位には、この40年間の牛群検定への地道なお取り組みに対して深謝申し上げ、正確な検定を旨とした引き続いてのご対応、そして牛群検定万般へのご支援・ご協力をよろしくお願ひ申し上げまして、記念誌発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

最後になりますが、本誌を発刊するにあたりまして、ご寄稿を賜りました方々をはじめ、多大なご尽力を頂いた関係各位に対して篤くお礼申し上げます。